「越前さんの蔵」が語る、かつて在った「範多農園」の物語

小平市鈴木町にある植物防疫資料館の展示蔵は戦前、「越前さんの蔵」と呼ばれ、広大な範多農園の中にあった…

資料館展示蔵正面（春）
（植物防疫協会資料館提供）

「除蝗録」ウンカの防除法を記述した古書

2階にあるハンターコーナー

2階のポスターコーナー

範多範三郎（ハンス・ハンター）氏（中込敦子さん提供）

ひっそりと佇む蔵の歴史

小金井街道農業検査場バス停から2分ほど歩くと、「日本植物防疫協会」の看板が目に入る。この敷地内の奥に資料館展示蔵がある。ここがかの大岡越前守の屋敷内にあったものと伝えられる白壁の土蔵。夏の終わり、桜や梅の木々に正面を覆われ、ひそやかに建つ姿には孤高さと品格とが感じられた。

正面入口にこの蔵のルーツと所有者であった範多農園主、ハンス・ハンター（日本名・範多範三郎）についての説明が書かれている。昭和12年頃、当時はまだ小平町であった鈴木新田に1万6千坪におよぶ広大な農園別荘がハンス・ハンターによって造られた。その折、麻布の別宅にあった土蔵が農園に移築された。元々、それは大岡越前守の屋敷内にあったものといわれ、ハンス・ハンターが惚れ込み麻布の別宅に移築したものだった。

昭和19年、米軍機の焼夷弾直撃で農園の建物は消失したものの、この土蔵は類焼を免れた。戦後の23年に植物防疫協会（当時は農業協会の名称）が農園内の屋敷部分を購入し、蔵も所有することになった。その敷地内でも蔵は2、3回移されたが、膨大な資料の保存施設として使われてきた。老朽化が進むうち、平成18年蔵内部を改装。貴重な資料を展示する施設として昨年6月から一般開放されるようになった（毎月第1、第3金曜日）。由緒ある蔵が流転の末、ようやく人々の手に届くところへたどり着いたかのように思える。

展示蔵には貴重な資料の数々

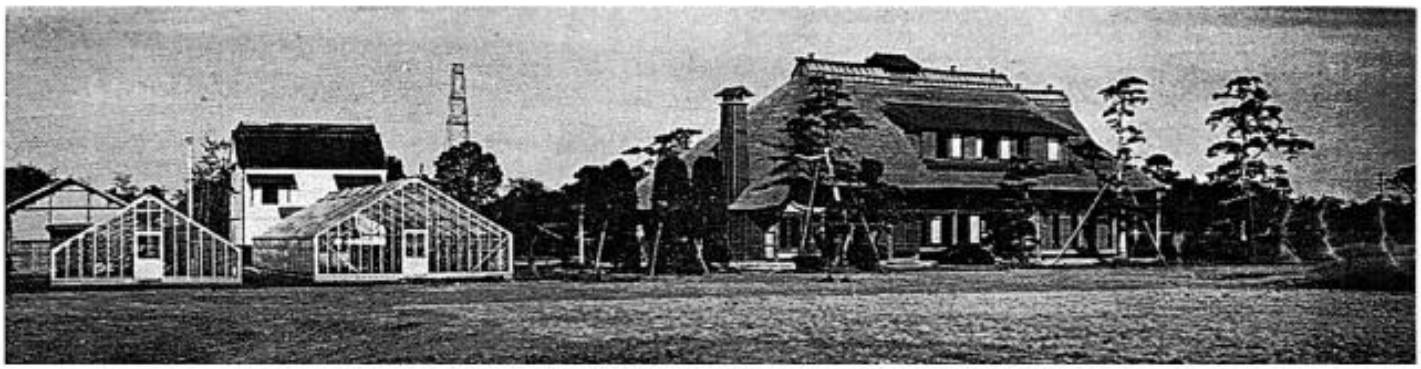
資料館を担当する協会の田中良明さんが館内を案内してくださった。

2階建ての蔵内はフローリングの床に白い壁、明るくこじんまりとしたスペースに古書や防除器材などが展示されている。1階で目を引くのは東京帝国大学農科大学で教材として使われた、明治37年発行の稲熱（イモチ）病と梨赤星病の掛軸。まるで植物画のように細密に描かれている。

「これはウンカの防除法を記した本で貴重なものです」と示してくださったのは和綴じの「除蝗録」。初版は文政9年（1826）だという。鯨の絵が描いてあり、鯨の油を水田に流し込んで、ウンカを防除する方法が詳細に紹介されている。四国山陰地方の神社の虫除け札、虫送り行列や虫塚の写真なども当時の風習がわかり興味深い。

2階には明治から昭和にかけてのポスターがずらり。共同害虫駆除の呼びかけポスターや「銃の代りに噴霧器とって稲を守るも國の為」などといった戦時中の標語チラシは、戦時下の米増産に懸命だった往時が偲ばれる。

「農作物を生産する人々がこれまでいかに苦労して、病害虫と闘ってきたかを知る一端として、また、この蔵の歴史とも合わせて多くの方々に足を運んでほしい」と田中さん。



範多農園母屋と２棟の温室。奥に土蔵も見える（中込敦子さん提供）

日光でのハンス・ハンター

２階にはハンターコーナーが設けてある。ハンス・ハンターの写真や略歴、範多農園の母屋や内部の写真などかつてこの地にあり、７年くらいで姿を消した素晴らしい建物を垣間見ることができる。また「動いているハンターさんが見られますよ」と田中さんが設置してあるパソコンでＤＶＤを見せてくださった。

そこには日光中禅寺湖畔で鱒釣りやヨットレースに興じるＨ・ハンターの姿が。資料館開設の前にＨ・ハンターと縁がある日光市に田中さんたちが出向いた折、市が保管している16ｍｍフィルムの一部をダビングさせてもらったもの。昭和４年にＨ・ハンター自身が撮影したフィルムとされているが、「夏の外務省」といわれた当時の日光で、各国外交官や日本の政財界人たちとの華やかな交流を示す貴重なフィルムだ。Ｈ・ハンターはこの国際交流の場である「東京アングリング・エンド・カンツリー倶楽部」を創設した人でもあった。

ハンス・ハンターを追い求めた人

それにしてもハンス・ハンターとはいかなる人物だったのだろう。そしてなぜ小平に農園を拓いたのだろう。そんな疑問にこたえてくれるのが、小平市在住で元アサヒタウンズ記者の中込敦子さんだ。

中込さんは約20年前に範多農園のことを知り、側近としてＨ・ハンターに長年仕え、元範多農園の敷地内に住んでいた伊藤徳造さん（平成18年に95歳で他界）に生き証人としての貴重な話を聞く幸運を得た。このことがきっかけとなり、ほとんど知られていなかったＨ・ハンターの足跡をたどる旅を約15年にわたり続けた。ともかくＨ・ハンターに関連することをキャッチすれば、どんな小さなことでも追い求めてゆく。旅はＨ・ハンターが開発した大分県や宮崎県の鉱山跡など山奥にまで及んだ。その詳細な記録を「在りし日の範多農園を訪ねて」シリーズとして自身のホームページで発表している。

「広大な農園をつくった人物というだけではなく、調べていくうちにハンス・ハンターが日本の近代化のためにどれほど貢献したかがわかり、これは記録していかなければと。ホントに入れ込んで取材していました」と当時を振り返る中込さん。

英国と日本の間で

Ｈ・ハンターは明治17年、英国人実業家の父と和歌山出身の日本人の母との間の次男として、神戸で生まれ、範多範三郎と名付けられた。７歳の時にロンドンに留学。グラスゴーで青少年期を過ごし、19歳から３年間王立鉱山学校（Royal School of Mines）で鉱山学と冶金学を学んだ。卒業後は米国をはじめ各国の鉱山を視察調査。明治43年、帰国を前に英国籍を取得。英国名はHANZABUROU HUNTER で綴りを略しての通称が HANS HUNTER である。ロンドン時代に英国紳士の嗜みとされる、釣りや狩猟、競馬、美術品の蒐集、蘭の栽培などを身につけたといわれる。

帰国後は朝鮮の金鉱山、大分・鯛生金山、宮崎・見立鉱山などの開発・経営に手腕を発揮した。いずれも採掘に英国製の最新設備を入れ、クラブハウスには洋式バスに水洗トイレ、スチーム暖房を備えた。九州の山奥が活気に満ちた時代だったという。

小平に壮大な農園別荘

赤坂榎坂町に「範多事務所」を構え、多岐にわたる事業を展開していたが、時代は軍国主義に傾いていた。世界大戦が始まることを確信し、戦時下の食料不足を予想していたＨ・ハンターは自給自足生活ができる準備にとりかかった。昭和12年小金井カントリー倶楽部創設の発起人のひとりだったＨ・ハンターはゴルフ場に隣接した１万６千坪を農園用地として買収。そのうち４千坪を宅地に、１万２千坪を農地にした。

現在母屋跡は農薬検査所のビルに。長屋門に隣接する場所が現在の植物防疫協会。
農地は現在都営アパート、テイジンアパート、住宅等になっている。

母屋２階のゲストルーム
（中込敦子さん提供）

母屋は那須塩原から豪壮な茅葺屋根の庄屋屋敷を移築。その解体・運搬作業は難事業だったとか。設計は清水建設に勤務する米国帰りのデザイナーに依頼した。母屋は建坪１３０坪。１階部分は囲炉裏の間もある純和風の造り。２階にはゲスト用のベッドルームが３室あり、バス、水洗トイレつき。広い室内には高価なペルシャ絨毯が敷かれ、壁にはコレクションの絵画。小金井カントリーのグリーンが見渡せる各室南側の窓には障子がはめられていた。調度品にしても一流ホテルもかなわないほどだった。メーカーに改良させたオートプレーヤー式の最新式ステレオを備える一方で、ダイニングテーブルは樹齢数百年の流木で特注したもの。和と洋、新と旧、それまでの一切の事業を整理し資産をつぎ込み、Ｈ・ハンターの理想を注ぎ込んだ、類をみない母屋であった。

「新進気鋭に富んだイギリス人の父Ｅ・Ｈ・ハンターと、和歌山の士族の娘だった母親・平野愛子（後に範多姓に改名）の血を受け継いで、両国の伝統文化を醸造発酵させたのがＨ・ハンターではないだろうか」と中込さんは記している。

西洋野菜栽培のさきがけ

１万２千坪に及ぶ農園もまた画期的なものだった。専門家に相談しながら本格的な有機肥料による農地改良に取組んだ。母屋の西側にはスチームヒーターを備えた鉄骨ガラス張りの温室が２棟。そこでは当時としては珍しいセロリやピーマンなどの西洋野菜を栽培し、キュウリやトマトの水耕栽培も試みていた。ヌートリアというネズミを巨大にしたような南アフリカ原産の動物も飼育されていた。そして車庫を兼ねた長屋門のなかには、ロールスロイス、キャデラックなど７台もの自家用車が並んでいたという。当時の小平の農家事情に重ね合わせると、全く別世界の夢の国のことのようだ。

隣接するゴルフ場との境界には柴戸がつくられていて、ゴルフ帰りの友人たちがそこから出入りしていた。駐英国大使の任を解かれ浪人中の吉田茂も立ち寄り、お気に入りのシェリー酒でＨ・ハンターとグラスを傾けていたという話は驚きだ。

範多農園の終焉

昭和15年には日本国籍の回復を申請し、30年ぶりに範多範三郎に戻った。それまで築き上げた資産が英国籍のままだと封鎖される気配があったからだ。太平洋戦争が激しさを増し、昭和19年４月19日小平町上空に飛来してきたＰ51戦闘機による機銃掃射の攻撃を浴び、母屋が焼夷弾で狙い撃ちされた。茅葺屋根のあちこちから火の手があがり、ひとたまりもなく母屋と長屋門は炎上したのだった。価値ある書画、骨董も調度品も、長年かけて収集した貴重な蝶の標本もすべて灰になってしまったとのことだ。

失意のＨ・ハンターは直後に脳軟化症で倒れ、寝たきり状態になったため、入籍していた再婚相手の妻のきぬ子と幼い娘を伴い中禅寺湖畔の別荘に疎開。その後治療のため都内に移ったが、昭和22年９月24日64歳でこの世を去った。Ｈ・ハンターの夢と理想の「範多農園」は時代の波間にはかなく消え去ってしまった。

範多農園の生の姿を見た長老の方はいないものかと、あちこちに訊ねてみたが、70年も前のことを知る人はいなかった。風化していきそうな歴史を遺そうと、この蔵が一人で踏ん張っているように思える。蔵２階の小さな丸テーブルで、かつてここに在った英国カントリーサイド風の素晴らしい農園のことに思いを巡らす…秋の日の豊潤なひとときかもしれない。

■日本植物防疫協会資料館
小平市鈴木町２－７７２
TEL　０４２（３８１）１６３２
■開館日　毎月第１・３金曜日
■開館時間　１０：００～１６：００
中込敦子さんのホームページ
http://www.h4.dion.ne.jp/~mogura1/index.htm
参考図書「日光鱒釣紳士物語」
福田和美著（山と渓谷社）